ホロホロ鳥のカナン

「お母さん、僕、バードパーク行きたい！」
僕がお母さんにそう言ったのは、中学一年の夏休みのある日、お父さんの仕事が暫く休みだからどこへ行こうかという話が出たときの事だった。
僕には弟が二人居て、今小学五年の真ん中の弟は遊園地に行きたいと言っていたけれど、普段から偶に連れていって貰っているので、また別の日にと言う事になった。
一番下の弟はまだ小学生になったばかりで、いつも僕の後を付いて歩いている。だから、一番下の弟の希望は、僕の行きたいところと一緒と、どういう所なのかもわかっていない様子でそう言った。
明日早速バードパークに行くという話になり、一番下の弟はどんなところ？　どんなところ？　と頻りに僕に訊いてくるし、真ん中の弟も、そんなに悪い顔はしていなかった。
そもそも、なんで僕がバードパークに行きたいと言ったのかというと、実は、僕は横浜にあると言うそのバードパークに憧れがあったからだ。
テレビで見たわけでも無い。

学校で噂を聞いたわけでも無い。
観光雑誌で見たわけでも無い。
それで、何故憧れているのかというと、僕が小学生の頃愛読していた小説に、横浜のバードパークが出てきたからだ。
小説の中に出てきたその空間に、一度足を踏み入れてみたかった。
「にーちゃん、とりさんたのしみ？」
「うん、楽しみだよ」
出かけられるのが嬉しいのか、僕の足下ではしゃぐ一番下の弟。
もう寝る時間だよと言っても僕から離れなくて、その日は弟を抱えて一緒に布団に入った。

翌日、朝早くからお母さんが運転する車に揺られて、僕達一家はバードパークのある横浜へと向かった。
車酔いで気分を悪くしてしまった弟二人に膝枕をしながら、窓の外を流れていく景色を見ていた。
途中渋滞に巻き込まれる事もあったけれど、車の速度が落ちたその瞬間に、窓の外に鳥が見えると、これから行くバードパークへの期待

が高まった。
一体どんなところ何だろう。
タワーの中に有ると聞いたから、そんなに広くは無いだろうけれど、一体どんな鳥が居るんだろう。
そんな事を考えて、車に揺られて、そうしていたら朝が早かったせいか眠くなってきて、気がついたら眠りこけていた。

目が覚めると、そこはタワーの近くにある有料駐車場だった。
海の近くにあるというタワーだけれども、この駐車場から見える海は、砂浜があるとかそう言う物では無かった。
海の向こうにも街が見えていて、ここは港町なのだなと思った。
車から降りた僕達は、揃ってそこに見えるタワーへと向かう。
東京にあるタワーとは違い、四色の紅白で、グラデーションに塗られたタワー。
鉄骨で出来たあのタワーのどこに、鳥たちが居るのだろう。
潮風を受けてそびえるそのタワーの下に立ったとき、僕はこれから、憧れの場所に入るのだと、思わず足に力が入った。

バードパークは、そのタワーの四階に有った。
タワーの中心にあるエレベーターホールを囲うように設置されたその場所は、確かに道幅は狭かったけれども、奥行き自体は短い物では無かった。
所々に置かれている鳥の説明を読みながらゆっくり進む僕を置いて、パーク内で鳥に与える事が出来る餌を持った弟二人とその面倒をみている両親は、どんどん先へと行ってしまった。
初めて見る沢山の鳥。
多分、南国の鳥なんだろう。
初めて見るその鮮やかな姿。宝石のような翼はすぐそこにあって、触れる事が出来そうなほどだった。
ふと、黒い影が目に入った。
よくよく見てみると、そこには丸くてずんぐりした、黒い鳥が居た。
身体の所々に白い斑点が有り、それが特徴的で、僕はあの小説の事を思い出した。
この鳥は、小説に出てきたホロホロ鳥だ。

そう思ってじっと見ていると、ホロホロ鳥がくちばしを開いた。
「わしに何か用があるのかな？」
「えっ？」
周りを見渡しても、僕以外に人は居ない。
目の前に居るホロホロ鳥がくちばしを開くと、その度に少しノイズがかった言葉が聞こえてきた。
「ここに来るお客さんは、みんなもっと派手な鳥ばかりを見るよ。君は随分とぢっと、わしのことを見るのだね」
いや、いきなり鳥に話しかけられたら目を離せなくなると思うのだけれど。
「え？　あの、なんで喋ってるんですか？」
するとホロホロ鳥はこう答えた。
「なんでかはわしも知らんよ。
けれども、気がついたら話せるようになっていた」
確かに、オウムや九官鳥のように話す鳥は居る。けれども、それは人間の言葉を丸暗記して繰り返しているだけなわけで、このホロホロ鳥みたいに会話が成立するというのは、なかなか考えがたい事だ

った。
　そう言えば、小説の中でホロホロ鳥は特別な扱いをされていたけれど、もしかしたら作者はこのホロホロ鳥に会ったのかもしれない。
そう思って、僕は暫くホロホロ鳥と話した。
　話の中で、ホロホロ鳥はこう言った。
種類の違いのせいなのかも知れないけれど、このホロホロ鳥は他の鳥よりも長生きで、ずっと生まれては死んでいく他の鳥を見守ってきたらしい。
「人間達は、死んだら遺体を燃やしてしまうのだね。
それがとてつもなく寂しいのだよ」
「土に埋めて、ずっと一緒に居たいんですか？」
「そうでは無いよ。
これはわしが勝手に思っているだけだけどもね。
わしが死んだら、わしの身体は人間に食べて欲しいのだよ」
　食べて欲しい。
何故このホロホロ鳥はそう思ったのだろう。
「死んだ後のこの血肉を、無駄にしないで欲しい。

病気で死んでしまったら難しいだろうけれど、わしの肉を食べる人間が居れば、わしはその人間の中でずっと一緒に居られる。そう思っているのだよ」

なんだかその言葉は寂しげで、このホロホロ鳥は、自分は決して人間より長く生きられない事を知っているのだと。そう思った。

それからまた暫くホロホロ鳥と話していたのだけれど、突然通路の奥から他の声が聞こえてきた。

「あー！　にーちゃーん！」

何かと思ったら、一番下の弟の後ろを足の細い鳥が追い回していて、くちばしで背中を突いている。

「おやおや、弟君が遊ばれてしまっているようだね。行っておあげ」

「あ、はい」

ホロホロ鳥に背を向けて弟の方へと一歩踏み出し、思い出したように振りかえる。

「あの、良かったら名前を教えてください」

「なんでだい？　わしはここにいる沢山の鳥の内の一羽でしか無いよ」

「あなたの事を覚えていたいんです」
　するとホロホロ鳥は一声鳴いて、こう答えた。
「わしの名前はカナン。
また遊びに来ておくれ」
「はい。それじゃあ、また」
　それだけ言葉を交わして、僕は泣いている弟の元へと駆け寄っていった。

翠の奥の瑠璃

ある日の放課後、私は授業の時にいつも着ている白衣もそのままに、昇降口前に有る生徒ホールへと来ていた。
手に持っているのは、Ａ４サイズの把手付きケース。その中には、漫画の原稿が入っている。
部活や下校で生徒が行き来する昇降口を横目に、私達はそこに集まっていた。
手に原稿を持った数人の生徒。何をしているのかと言えば、今日は私が所属している漫研の締め切り日なので、原稿を提出しに来たのだ。
とりまとめているのは、少し背の低い、私と同学年の男子生徒で、彼が漫研の部長だ。
漫研の部長に、それぞれ原稿を渡す。
この後暫くの間、製本まで付き合える部員で集まって、部長のクラスの教室でどの作品をどこに入れるのかの軽い編集をする。
部員達の原稿を、一枚一枚丁寧に扱う部長の手元を見て、頬が熱くなる。
自分が描いた作品を、こんなにも大切に扱ってくれるのが、嬉しかっ

た。

私が漫研に入ったきっかけは、この高校に入ってすぐの、一年生の時だった。

本年度初めて各クラスに配布されたと言う漫研の会誌を、興味本位で覗いたら、何故か一作品だけ小説が載っていた。

その小説は、すごく巧い物では無かったのだろう。

けれども、素直な言葉で自分の思い描く世界を綴ったその小説に、私は心を惹かれた。

この小説を書いた人に会いたい。そう思って漫研の集まりに顔を出したのが、漫研に入ったきっかけだった。

私は美術科で、部長は普通科の文系。

私達のクラスは離れていたけれども、漫研の部員達で集まるとき、いつも部長は優しくて、新刊の打ち合わせや締め切りの時に会うのがとても楽しみだった。

普段から休み時間の時に会いに行けば良いのだろうけれど、二年生

になってから私は汚れ除けの白衣を着ている事が多くなった。つまり、美術の課題を進めるために、芸術棟に籠もっている事が多くなったのだ。

部長ともっと側に居たい。今この時を一緒に過ごしている事を残したい。そう思っても、私は何も出来なくて。

部長が職員室前の印刷機で、自分が書いた小説も含めた部員達の原稿を刷る。原稿を印刷機にセットする、印刷機の枚数設定を指定する、その表情がとても楽しそうで、部長も何かを作るのが好きなのだなと、製本の度に思う。

ねぇ部長。それなら何で、私と同じ美術科に入らなかったの？

不定期で漫研の会誌を作りながら、やって来た三学期。先輩達は卒業制作があるし、私達も、先輩達の卒業制作展と一緒に開催される、作品展の出品作を作る時期になった。

去年は確か、日本画でモルフォ蝶を描いたっけ。あの時本当は岩絵の具を使いたかったけれども、お金が無くて、買えたのは一番安い水晶末だけだった。

今年も、日本画室に絵の具屋さんがやって来る。今年はちゃんとお金を貯めていたから、いくらかではあるけれど、岩絵の具が買えるはずだ。

そんな事を考えながら、私は洗濯しても落ちない膠と水干絵の具がこびりついた白衣を羽織った。

今年の作品展は何を描こう。そうぼんやりと考えながら、私は学校の図書館で図鑑を眺める。

蝶、蛾、蜂、蜘蛛、蜻蛉、蝗、色々な虫を眺めていく。

ふと、声を掛けられた。

「あ、白衣着てるからもしかしたらと思ったら。

こんな所で何やってるの？」

「あっ、部長」

顔を上げると、そこには漫研の部長が居た。

彼が手に持っているのは、図書委員会が毎月発行しているニュースで紹介されていた、ハードカバーの物語。

その物語は私も読んだのだけれど、とても綺麗で優しい話だった。

手に持った物語のように綺麗な顔をした部長の顔を見て、思わず言葉が口を突いて出た。
「年度末の作品展の題材を探していたんですけど、あの、良かったら部長がモデルになってくれませんか？」
突然の事で驚いたのか、部長が呆気にとられた顔をしている。どうしよう。断られたらどうしよう。そんな不安に駆られて、白衣の袖を握る。
すると、部長はふわりと笑ってこう答えた。
「うん。僕で良かったらモデルになるよ。
でも、もし途中で気が変わったら遠慮無く言ってね」
受けて貰えた。その事が嬉しくて、袖を握った手が震える。
私は図鑑を閉じて、これから暫く、放課後にモデルをよろしくお願いします。と、改めて挨拶をした。

その日の放課後から、私は部長を日本画室に招いて、部長のデッサンを取らせて貰った。
直線的ではあるけれど綺麗な形をした眉、奥二重で優しそうな瞳、

通っているけれど少し小ぶりな鼻、柔らかそうなふっくらとした唇。それらをデッサン用紙に写していく度に、私は今、部長と一緒に居る事を残せているのだと感じた。

部長と一緒に日本画室に居て、デッサンをして居られる時間はとても幸せだったけれども、いつまでもデッサンばかりをしているわけには行かない。

一週間ほどでデッサンを完了し、私はドーサ引きをしてパネルに水張りをした和紙に、部長の姿を写す作業に入った。

和紙に描き始めてから数日、墨での濃淡付けも終わり、彩色をはじめる。

先日絵の具屋さんが来たときに、いくらか岩絵の具を買ったけれども、際限なく使えるほどは手元に無い。

私が買った岩絵の具は、深い夜明け空色をした瑠璃。部長を描くのなら、絶対に使いたいと思った絵の具だ。

高貴な者の象徴とされるラピスラズリを砕いたその絵の具は、他の人の作品を大切にし、愛し、守る、気高い部長に相応しいと思った。

この瑠璃は、この絵の一番大切なところに使いたい。一番大切なところと言えば……
それを考えて、ふと、部長の笑顔が頭に浮かんだ。デッサン中に掛けてくれた、「頑張って」の一言。それを思い浮かべた一瞬、記憶の中の部長の瞳が、特に右目が、瑠璃色に光った気がした。

放課後は日本画室に籠もり、羽織っている白衣がまた膠と色とりどりの水干絵の具で染まったある日、私は遂に、部長の瞳を塗るところまで絵を進められた。
右の瞳を、膠で溶いたざらつく瑠璃で塗りつぶす。それから、左の瞳を同じ荒さの水晶末で塗る。
左右違う色の瞳の部長を見て、私の胸が高鳴った。
何故だろう、部長の瞳はこの色では無いのに、何故だかしっくりくる気がした。
このまま展示してもいい気はしたけれど、そうすると、私の部長に対する想いが他の人に知られてしまいそうで、それがこわくて、部長の瞳を両方とも、水干絵の具の緑青で塗りつぶした。

それから学期末も近づいて、学校最寄りの市民会館を借りた作品展が開催された。
会期中、私も在廊していた日があるのだけれど、その日にたまたま、部長がお友達と一緒に観に来てくれた。
一言だけ挨拶をして、その後はお友達と一緒に私達の作品を見る部長。
じっくりと、時間を掛けて、私達の作品を見てくれた部長。彼が会場から出るときに、私に声を掛けてくれた。
「僕の事、あんな風に描いてくれてありがとう。
また三年生になってもよろしくね」
「う、うん。また……」
部長の言葉が嬉しくて、上手く言葉を返せなくて。
部長は気付いたのかな？　緑色の奥に有る、瑠璃色に。